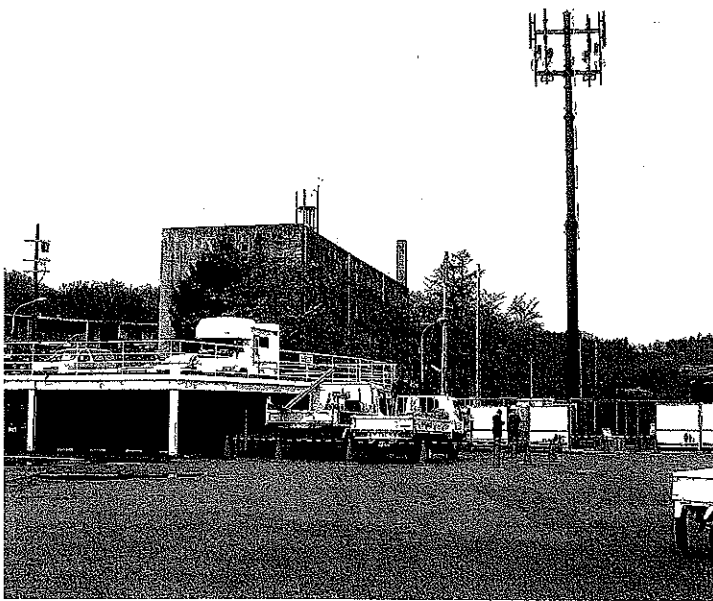




基地局を撤去後、体調不良が改善

文=加藤やすこ | フリーライター、VOC-電磁波対策研究会代表



兵庫県川西市のドコモ基地局の撤去作業は、地域住民が見守る中、4月14日から始まった

兵 兵庫県川西市の閑静な住宅地に、NTTドコモの携帯電話基地局の建設工事が始まったのは、2005年2月のことでした。この基地局は、バス会社の駐車場に建てられており、同年12月から稼働しています。その後、周辺では体調不良を訴える住民が増え始めました。

07年1月、住民は「電磁波公害をなくす会」を結成し、携帯電話基地局の設置・改造を規制する条例をつくること、電磁波の規制強化と全国的な疫学調査の実施を市が国に要請することなどを求める請願書を市議会に提出し、全会一致で採択されました。市議会議員の江見輝男さんによると、「条例はまだ制定されていないが、昨年8月、携帯電話会社社に通達を出し、事前に住民の了解を得よう求めた。携帯電話基地局はそれ以来、市内に1本も建っていない」そうです。

同会はこの基地局の稼働停止と、地権者であるバス会社との契約解除、健康被害に対する慰謝料を求め、07年5月、調停を申し立てました。

そもそも地権者であるバス会社は、地域住民の合意を得たら土地を貸す、と条件をつけていました。しかし、ドコモ側はわずか4軒から合意を得ただけで、「おおむねの合意がとれた」と虚偽の報告

をしていたのです。バス会社は契約の解除を申し入れ、昨年12月の調停で、08年4月に稼働を停止し、撤去されることが決まりました。

基地局の電波は4月3日に止まりました。その直後から、周辺では不眠や耳鳴り、頭鳴（耳鳴りの一種。頭の中心で音が聞こえる）、頭痛などの症状が消えたり、血圧が安定した方がおり、テレビやラジオの受信障害が解消された家もあります。

基地局から約170m離れた場所に住むGさん宅では、基地局が稼働してから、当時12歳の長男が不眠に悩まされるようになりました。布団に入っても眠ることができず、夜中に車の鍵を持ってきて「出かけよう」と訴えます。学校へ行っている間は体調が楽なようですが、帰宅するとすぐに出かけたいと言いつつ出さずになりました。

「基地局の電磁波が原因ではないか」と思ったGさんは、高周波電磁波を防ぐシールドクロスを買って、窓にかけてみました。その瞬間、長男は笑顔で本を読み始め、数カ月ぶりに笑い出したそうです。Gさんは簡易測定機で家の中を計っていましたが、06年夏から、電磁波が強くなり、長男の機嫌も悪くなりました。

4月3日の朝も、長男は眉間にしわが寄って機嫌が悪そうでしたが、昼前頃に弟と遊び出し、声を上げて笑ったので、Gさんは「電波が止まったのかな」と思ったそうです。後になって、午前11時頃に電波が止まっていたことがわかりました。住民は、3日に電波が止まる予定だが、2～3日遅れる可能性もあると聞かされ、正確な日時を知りませんでした。体がすぐに反応したようです。

約150m離れた場所に住むTさん（46歳）は、基地局が稼働してから体調を崩し、電磁波過敏症と診断されました。不眠や疲労感に襲われ、当時15歳だった次女も「学校から帰ってくるとキーンという耳鳴りが聞こえる」と訴え、頭痛や腹痛などの症状が現われ、怒りっぽくなりました。医師に処方された薬を服用した効果もあって、昨年12月ころからTさんの症状は徐々に治まっていたのですが、3日以降、毎日起きていたこむら返りが現われなくなりました。次女は朝の目覚めが良くなり、いらいらが治まってきたそうです。

川西市で稼働が止まってすぐに症状が改善した人が現われたことは、電磁波の影響が体調不良に密接につながっている証拠かもしれません。

かとうやすこ | 電磁波過敏症と化学物質過敏症を併発。患者としての経験と各地の取材を通して執筆。著書に「電磁波・化学物質過敏症対策」、「危ないオール電化住宅」【ユビキタス社会と電磁波】（緑風出版）